

ウェブ日記を読んでみよう、書いてみよう Let's read and/or write Web diaries.

ネットワーク情報学部 山下清美

School of Network and Information Kiyomi YAMASHITA

Key words: internet-communications, personal web sites, web diaries, self expression

1. はじめに

日本のインターネット人口はここ数年急増し、平成 13 年版通信情報白書によると、平成 12 年末時点の全国の 15 歳以上 79 歳以下人口(10,351 万人)に対し、インターネット利用者は 4,708 万人に達している(郵政事業庁, 2001)。さらに 2001 年 9 月に実施された調査では、パソコンもしくは携帯電話の一方あるいは両方でインターネットを利用している人は、生活者(15 歳以上 59 歳以下)の 56.6%と、ついに半数を超えたと判断できる数値も出ている(野村総合研究所, 2001)。

インターネットを利用したコミュニケーションには、メール、掲示板、チャット、WWW などの多様な手段があるが、1990 年代半ばから爆発的な勢いで広まった WWW は、情報の流通のしかたや人々のコミュニケーションのしかたを変化させた。WWW は、個人が誰でも情報発信することを可能にしたのである。

2001 年 6 月に実施されたあるオンライン調査によると、回答者のうち 21.4%の人が個人ウェブページを所有しており、この比率は過去 5 年間ほぼ安定している(CSJ, 2001)。つまり、ウェブ上のオンライン調査に回答するアクティブなインターネットユーザに限れば、およそ 5 人にひとりが個人ウェブページを所有していることになる。個人ウェブページの実数をつかむのは困難だが、ある推定によると、2001 年の個人ウェブページ数は約 240 万件に上る(刀川, 2001)。この数は上述した 4,708 万人を超えると推定されるインターネット利用者の約 5%に相当する。

さらにここでは、個人ウェブサイトのコンテンツのひとつであるウェブ日記に焦点を当てる。ウェブ上に個人の日記を書くというと、一見奇異な印象を持たれることが多いのだが、実際には非常に多くの人々が、個人ウェブサイト上に広い意味での日記を掲載している。どのくらいの人々がウェブ日記を書いているかを把握することは困難なので、少し古いデータになるが、川上らの調査では、あるプロバイダでウェブページを所有している人の 1 割が日記を掲載しているという(川上ら, 1996)。これを個人ウェブページの推定数である 240 万件に当てはめると、実に 24 万人の日本人がウェブ上に日記を掲載している勘定になる。

相当に荒っぽい推定ではあるが、この数字はそれほど大

げさではないと思われる。ウェブ日記は、大学などのサイトやプロバイダ上の個人ウェブページで書いている人も、それだけでなく、さまざまなレンタルのウェブスペースやレンタルの日記サイトでも、手軽に書くことができる。1999 年にスタートしたレンタル日記サイトの「さるさる日記」の場合、現在までに通算で 7 万件を超える日記が登録されているし、後発の「エンピツ」で通算 5 万件以上、「memorize」で 2 万件以上となっている。既に削除されたり、同じ人が複数書いている点を考慮に入れても、現在多数のサービスがあるレンタル日記サイトを利用したウェブ日記だけでも、10 万人近い人の日記がある可能性は十分にあると思われる。またウェブ日記リンク集の「日記才人」の場合、登録日記件数は通算で 16000 件を超え、ウェブ日記を含むテキストサイトが集まっている「ReadMe! Japan」の登録件数は 19000 件を超えている。両者はある程度重複してはいるが、こうしたリンク集に登録しているウェブ日記は、全体のごく一部であると考えられることから、さきほど荒っぽく勘定した 24 万件という数字は現実にありうる数だと思われる。

本稿では、ウェブ日記がインターネット上のコミュニケーションにおいて、どのような役割を果たしているのかを簡単にまとめ、実際にウェブ日記を読み、書き、コミュニケーションすることのメリットとデメリットについて考察する。

2. ウェブ日記とはどのようなものか

ここまで特に説明なしにウェブ日記という語を使ってきたが、何がウェブ日記か(あるいは、何がウェブ日記でないか)を明らかにすることは、実はとても難しい。もちろん厳密な定義などはない。試みにウェブ日記とは何かを説明しようとする、ウェブ上に置かれたテキストで、(原則として)日付がついていて、ある程度の頻度で更新されて、(原則として)ログが蓄積されていくもの、というくらいだろう。

更新は毎日のものもあるが、それより少ない場合も多い。逆に一日に何度も更新されるものもある。日付がつくことが日記としての最低条件だろうが、中には明確な日付をつけていない場合もある。日付がなくても、ある程度の頻度

で更新されていけば、それもウェブ日記と呼んでさしつかえないと思う。またウェブ上のテキストも、日記帳と同じように通常はログが時系列的に蓄積されていくが、意図的にログを残さないウェブ日記というものもある。

内容についても、日常雑記、仕事の記録、本や映画などの感想、時事評論、批評、エッセイ、日記論、日記読み日記など多種多様である。いわゆるサイトの新着情報(What's new)の中にもウェブ日記に近いものがある。一方でコラムのようなスタイルも、ウェブ日記にはよく見られる。また中にはフィクションの作品を、日記と同じように定期的に更新しているものもある。

ウェブ日記という語のほかに、ネット日記という語もみかけるがあまり一般的ではない。同種の用語として、初期にはハイパーダイアリーという語が使われたが、これはウェブ日記がハイパーテキストによって書かれており、リンクを張って言及することでコミュニケーションが発生するという側面を強調したものである。しかし現在では、リンクを張るということに対する考え方が多様になり、ウェブが本来ハイパーテキストの機能を備えていることをあまり意識しないウェブ日記も多くなっている。また似た用語として、テキストサイトという語が特に最近よく使われる。ある意味では、日記、エッセイ、小説など、テキストを主たるコンテンツとした個人ウェブサイトの総称とも言えるのだが、現実には、ある特定のリンク集でアクセスランキングを競うサイト群を指す意味合いが強い。

ここではやはりウェブ日記という語で、ウェブ上に、自由なスタイルで、ある程度の頻度で更新され、蓄積されていく(日付を伴う)テキストを指すことにする。

3. ウェブ日記を書く主体(名前)

ウェブ日記だけでなく個人ウェブサイトを開く場合、実名で書くか匿名(ハンドル)で書くか、というのは非常に重要な分かれ目になる。インターネットがもともとアカデミックユーザのためのネットワークであったために、WWWの初期の頃は、大学や研究所などのサイトに実名でウェブ日記を書いている人達が多かった。しかしハンドルの使用が文化として定着していたパソコン通信利用者がインターネット上に個人ウェブサイトを開くようになって状況は変化した。さらに、大学や研究所などの公的機関のサーバ上に個人のコンテンツを置くことに対して、次第に柔軟性がなくなってきたために、仕事用のサイトと私用のサイトを分ける傾向が強まったことも、匿名使用を広げた。現状では、匿名(ハンドル)でのサイトの開設が一般的であろうし、特に、ウェブ日記のように個人情報と密接にからむ場合、実名で書くのはそれなりのリスクが伴う。

実際初期からウェブ日記を書いている人の中にも、継続して実名で書いている人もいるが、途中からサイトを移動してハンドルで書くようになった人もいる。また、実名と匿名の日記を別々に書いている人もいる。匿名でウェブ日記を書く場合も、固定したハンドルを使い続けることで、

ある程度安定したネット上の存在になっている人もいるが、サイトを閉鎖して新たに開設するたびにハンドルを変え、あたかも別人に切り替えるように振舞っている人もいる。

どのような名前で書くかは、それぞれの目的やリスクとのバランスを考えて、その人次第で判断すればよいだろう。

4. なぜウェブ日記を書くのか

ウェブ日記を書く理由に入る前に、なぜ多くの人々が自分の個人ウェブページを開くのかについて触れておく。これまでに行われたいくつかの調査によると、個人ウェブページを開く主な動機や理由として、情報発信、自己表現、コミュニケーションの3つがしばしば共通して挙げられている。個人ウェブページは、自分が持っている情報や知識などを提供し、また自分という人間を知ってもらい、そうした情報提供や自己表現を通して、他者とのコミュニケーションを図る場とみなされているのである。

しかし実際にウェブページを開いてみるとよくわかるのだが、上記の3つの目的を満たすことは容易ではない。まず、発信すべき情報を自分が持っているかどうか、ということが問われる。さらに、自分の何をどのように表現したいのかをつきつめて考えると、自分がどういう人間かという根本問題に突き当たってしまう。そして、コミュニケーションしたいと思っても、ウェブページ上にただコンテンツを置いただけでは、誰もアクセスしてはくれないし、ましてフィードバックが来ることはほとんどあり得ない。

つまり個人ウェブページを開くのは簡単だが、コンテンツを整え、それをコンスタントに更新し、双方向のコミュニケーションにつなげるのは必ずしも容易なことではない。そのため、いったんウェブページを開いても、長続きしないケースは多い。

実はウェブ日記は、こうした個人ウェブページを開く際の悩みを、ある程度解決してくれる。早い話が、日記なら誰でも書ける。しかも毎日書ける。したがって、発信する内容がない、あるいは表現すべき自分がわからない、という人でも、日記という形式を取れば、比較的容易に、情報発信や自己表現が可能になるのである。

さらに、他人の日記など読んで面白いはずないと思われるかもしれないが、これが案外面白い。何気ない日常を毎日読んでいるうちに、そこに等身大の人間の存在が感じられることも少なくない。またたくさんの人が書いているので、その中にはひとつやふたつ、自分と同じ興味や関心を持つ人がいて、書かれている内容が貴重な情報になることもある。そうした情報や書き手本人に対する興味がきっかけになって、メールのやりとりなど、双方向のコミュニケーションが発生する可能性はあるのである。

5. ウェブ日記によるコミュニケーション

なぜ人々はウェブ日記を書き続けるのか。それはおそらく書く人それぞれによって少しずつ違うはずである。ウェブ日記を書くことそのものが目的ではなく、ウェブサイトのアクセスを増やすための手段にすぎない、という人もいだろう。あるいは、自分の仕事や研究のために、あとで参考になるかもしれないことを書き留めている、という人もいだろう。あるいは、自分の悩みや感情を吐き出し、それを誰かに受け止めてもらいたいと思っている人は少なくないはずである。さらに、自分はこんな人間です、ということを書くことによって、それに共感してくれる人との新しい出会いを期待している人もいだろう。ウェブ日記のアクセス数が増えて、ランキング競争に勝つことに血眼になっている人もいる。

しかし特に注目したいのは、ウェブ日記を書くことは、自分を理解したり感情を表出したりするという、自分自身のためという側面と、読む人との間にコミュニケーションが発生し対人関係が広がるという、コミュニケーションのためという側面の、両面があるということである。

ある程度継続してウェブ日記を書いている人々は、このふたつの側面が密接に関係していることにしばしば気づくようである。自分のためだけに書くのであれば、ウェブ上に書く必要はない。しかし、読み手が存在しているということを多少なりとも意識して書くことによって、読む人にもわかるように自分のことを書こうとする。その結果として、自己理解が深まるのである。また、他の人とコミュニケーションしたいと思ったら、ある程度自分のことを開示する、つまり胸襟を開くことが効果的である。したがって自分を表現することが結果的に人とのコミュニケーションを活発にすることにつながるのである。

ウェブ日記はあくまでウェブ上に置かれる日記であり、したがってコミュニケーションの手段であると考えべきだが、その一方で日記というものが備えている、書くことで自分を見つめるという性質が、ウェブ日記の重要なポイントになっていると言えるだろう。自分のことを語りたい、あるいは、自分のことを聞いてもらいたい、ということが、おそらくはウェブ日記を書く動機のもっとも純粋な部分になっていると思われる。ウェブという、人に読んでもらえる場だからこそ、人はそこに日記を書くのである。

ウェブ日記を書いている人の中には、新しい人間関係を求めないという人も多い。少数の知人だけに URL を知らせ、ひっそりと書くやり方である。しかしその一方で、ウェブ日記を通して新しいネット上の関係を作り、人の輪を広げていこうとする人々もいる。ウェブ日記が登場した頃から、読みたい日記の更新時刻を取得するプログラムを作ったり(いわゆるアンテナ)希望者が登録するウェブ日記のリンク集を作ったりする人々が現れた。また、ウェブ日記生成システムを個人で作成して公開する人々もいて、そうしたプログラム開発の相互援助がコミュニティの形成を促すことにもつながった。さらにこうした動きは、

その後さまざまな経緯を経て、ディレクトリサービスや、レンタルウェブ日記サービスに広がっている。このようにして、ウェブ日記は単に書くだけではなく、また読むだけでなく、読み合う、リンクを張って言及しあう、あるいは、メールや掲示板でやりとりをする、といった形で、コミュニケーションの輪を広げているのである。

コミュニケーションの輪が広がれば、当然摩擦も生じやすい。ネットニュースや掲示板で起きると同様のトラブルが、ウェブ日記の間でしばしば見かけられる。そうしたトラブルが原因でウェブ日記を書くことをやめたり、個人ウェブサイトを閉鎖したりするケースも少なくない。特にウェブ日記は、自分の意見や感情をストレートに述べやすいため、他人への配慮が足りない書き方をしてしまうことがある。また、読み手を意識しているとはいえ、どんな人が読んでいるかまでは把握できないため、予想外の反応に出くわすこともある。そして、書かれた文章だけでは、書き手の意図が伝わりにくいこともあるため、誤解が原因でトラブルになることもある。さらにウェブ日記には、自分の個人情報不用意に漏らしてしまうという危険もあり、トラブルが起きた場合、深刻な事態も起きかねない。したがって、ウェブ日記を書いたり読んだりする場合、そうしたトラブルに巻き込まれる可能性がゼロではないことは覚悟しておかないといけないうだろう。実際多くのウェブ日記が、トラブルを経験したり、それを身近に見聞きしたりしながら、成長していく。

次節からは、こうしたマイナス面も考慮に入れて、ウェブ日記を読んだり、書いたり、あるいはウェブ日記を介してコミュニケーションすることの、メリットとデメリットを思いつくままに列挙してみる。具体的にウェブ日記の世界を経験してみたいという方のための、簡単なガイドである。

6. ウェブ日記を読もう

ウェブ日記を読むメリット(読んでみなければわからない楽しみ、得すること)を挙げてみる。

- ・ 他の人はどんなことを考え、どんな生活をしているのだろうか?ということを知ることができる(かもしれない)。
- ・ 自分に似た人が見つかるかもしれない。見つかると、ちょっと嬉しい。
- ・ 自分とは全然違うタイプの人が見つかるかもしれない。これまた好奇心をそそられるかもしれない。
- ・ こんなことで悩んでいたのは、自分だけじゃないんだ、という気持ちになれるかもしれない。
- ・ ああ、みんな頑張ってるんだなあ、と思って、元気が沸いてくるかもしれない。
- ・ へえ、面白そうな本(映画など)だなあ、と思って、自分も読もう(観よう)と思うかもしれない。
- ・ 社会で起きた事件や出来事についての、普通の人の見解を読んで、参考になるかもしれない。

「ウェブ日記を読んでみよう、書いてみよう」(山下清美)
ネットワーク&インフォメーション 2002

- ・ 違う立場の人(異性、異年齢層、夫と妻、親と子など)の、生活や考え方がわかって、身近な人のことが少し理解できるようになるかもしれない。
- ・ 自分が知っている情報や知識を求めている人がいたら、メールなどで教えてあげよう。人の役に立つというのは気持ちのいいものだ。

ウェブ日記を読むデメリット(こんなことに注意しましょう)を挙げてみる。

- ・ 日記を読むのが面白くて、読まずにいらなくなり、ついつい時間(お金)を浪費してしまう。
- ・ 日記の内容が魅力的で、書き手の存在に深入りしてしまう。
- ・ 日記を書いている人が自意識過剰に思えて、ばかばかしくなる。(でも、読んでしまう。)
- ・ 日記の内容に誤りや誤解を見つけると、忠告してあげたくなってしまう。
- ・ 世の中なんてばかな奴がいるんだ、と腹が立ってしまう。
- ・ 書かれてないことまで推測して、あれこれと思い悩んでしまう。

7. ウェブ日記を書こう

ウェブ日記を書くメリット(書いてみなければわからない楽しみ、得すること)を挙げてみる。

- ・ 自分の生活記録を残せる。
- ・ 読んだ本や、観た映画などの記録が残せる。
- ・ 自分がどんな人間か、何を考えているかを、人に知ってもらうことができる。
- ・ 自分の意見はこうだ、と正々堂々と表明することができる。
- ・ 頭にきたことや、吐き出したいことを、ある程度表出することでストレスを除くことができる。
- ・ 自分の考えや悩みを人にもわかるように書いてみることで、冷静にとらえられるようになる。
- ・ 普通なら見逃してしまうような、あるいは、忘れてしまうような、生活の中での細かいことをよく観察するようになる(ネタ探し)。
- ・ 日記の内容が評価されて、仕事の誘いがくるかもしれない。
- ・ こんなこと知りませんか、教えてください、と日記で呼びかけると、教えてくれる人がいるかもしれない。
- ・ 去年の自分はどうかっけ、と振り返ることができる。(過去ログを残してあれば)

ウェブ日記を書くデメリット(こんなことに注意しましょう)を挙げてみる。

- ・ 誰が読んでいるかわからないので、個人情報を出しすぎないようにする。
- ・ 家族や友人、仕事仲間が読むかもしれない。もしの場合、嫌な思いをさせないように。
- ・ 読み手の存在を忘れて、恥ずかしいことを平気で書いて

てしまう危険がある。

- ・ 日記を書くのが面白くなり、他のことがおろそかになるかもしれない。
- ・ 毎日の生活で、日記のネタを探すことばかり考えるようになってしまうかもしれない。
- ・ 書くことがない、うまく書けない、(でも、読者は待っているかもしれない)というプレッシャーを感じ落ち着かなくなるかもしれない。

8. ウェブ日記でコミュニケーションしよう

ウェブ日記コミュニケーションのメリット(思いがけない出会いがあったり、世界が広がったりするかもしれない)を挙げてみる。

- ・ 他の人の日記がいいな、と思ったら、メールを送ってみよう。おそらく喜んでくれるだろう。
- ・ 自分の日記に好意的なメールをもらったら、お礼のメールを送ってみよう。意気投合するかもしれない。
- ・ 日記のリンク集に登録して、ウェブ日記コミュニティに参加してみよう。いろんな日記があるし、日記を読みやすい仕組みになっている。またランキングなどもあるので、日記を書く励みになるかも。
- ・ 日記だけではなく、掲示板やチャットも併設して、日記の読者と活発なコミュニケーションをしてみるのも楽しいかもしれない。
- ・ 他の人の日記に触発されたら、文中リンクで言及してみよう。相手がアクセスログ解析をしていれば、察知してくれて、ひょっとするとコメントを返してくれるかもしれない。こういう何気ないコミュニケーションは、メールやBBSでは味わえない。
- ・ 日記どうして意気投合する人を見つけたら、オフ会に出てみるのもいいかもしれない。ネット上だけでなく、実際に会えば、どんな人かわかる。友人が増えるかもしれない。

逆に、ウェブ日記コミュニケーションのデメリット(こんなことに注意しましょう)も存在する。

- ・ げっそりするような、いやなメールをもらうかもしれない。
- ・ 好意でリンクしたのに、相手は勝手にリンクするな、と怒るかもしれない。
- ・ 自分が書いたことに対して、思いもなかったような批判をされるかもしれない。相手に理解を求めようと努力すると、かえって泥沼になるかもしれない。
- ・ リンク集のランキング競争にまつわる、人間の醜い側面を見て、げんなりするかもしれない。
- ・ コミュニティの話題に遅れまいとして、たくさん日記を毎日読むはめになり、生活時間を圧迫されるかもしれない。
- ・ みんなが楽しそうにコミュニケーションしているのに、自分だけ取り残されているような寂しい思いをするかもしれない。

「ウェブ日記を読んでみよう、書いてみよう」(山下清美)
ネットワーク&インフォメーション 2002

- ・ ストーカーのような人からの、しつこいメールに悩まされる危険がないとはいえない。2チャンネルに興味本位で取り上げられて、いわゆる「晒される」状況になる可能性もある。
- ・ オフ会でウェブ日記の書き手と実際に会って見たら、日記の印象と全然違う雰囲気で、びっくりするかもしれない。

9. おわりに

すでにウェブ日記を書いている、という人もいるだろうが、まったく知らないという人もいるだろう。ウェブ日記についてさらに知りたい場合は、実際にウェブ日記を書いている人たちのウェブ日記論を読むのがもっともよい。また、やはり何よりも、いろいろなウェブ日記を読み、自分でも書いてみるとよいだろう。それも短期間ではなく、ある程度継続して読んだり書いたりしないと、なかなかその世界を理解することはできない。本稿の最後に、付録として、参考になりそうなURLを挙げておく。あなたもウェブ日記を読んで(書いて)みませんか。

引用文献

- サイバースペースジャパン 2001 第14回CSJ 利用者調査結果[オンライン]<http://www.csj.co.jp/www14/>
- 川上善郎・田村和人・内田斉 1996 インターネット・オンライン調査報告書[オンライン] <http://www.ntv.co.jp/bekkoame/>
- 野村総合研究所 2001 『情報通信利用者動向の調査』2001年11月[オンライン] <http://www.nri.co.jp/news/2001/011121/index.html>
- 刀川真 2001 コミュニケーション・モデルに基づく個人ホームページの受信者アクセプト率推定 日本マス・コミュニケーション学会秋季大会研究発表会, 44-46.
- 郵政事業庁 2001 平成13年版情報通信白書[オンライン] <http://www.soumu.go.jp/hakusyo/tsushin/index.html>

参考文献

- 池田謙一 1997 ネットワーキングコミュニティ 東京大学出版会(特に、8章)
- 川上善郎(編) 2001 川上善郎編 情報行動の社会学 北大路書房(特に、3章)
- 川上善郎・川浦康至・山下清美 1998 サイバー空間における日記行動 報告書 [オンライン] <http://homepage2.nifty.com/rumor/nikki/nikki.html>
- Kawaura, Kawakami & Yamashita, 1998, Keeping a diary in cyberspace. Japanese Psychological Research, 40, 234-245.
- 川浦康至・山下清美・川上善郎 1999, 人はなぜウェブ日記を書き続けるのか 社会心理学研究, 14, 133-143.
- 山下清美 2000 WEB 日記は日記であって日記でない 川

浦康至(編)日記コミュニケーション 現代のエスプリ No. 391 至文堂 166-180.

山下清美 2000 自分を伝えるために書く、自分を見つめるために書く 読売 AD リポート ojo 4月号, 23-25. [オンライン] <http://www.psy.senshu-u.ac.jp/~yamasita/works/ojo04.html>

山下清美 2000 自己語りから、語り合う場へ 読売 AD リポート ojo 5月号, 23-25. [オンライン] <http://www.psy.senshu-u.ac.jp/~yamasita/works/ojo05.html>

付録

[ウェブ日記論]

日記原稿アーカイブ(大森望)

http://www.itokyo.com/ohmori/d_article.html

インターネットにおける自発的コミュニティの形成,特にWeb 日記に関して(永江孝規)

<http://www.shobi-u.ac.jp/~tnagae/pub/wdc/>

ちはるのWeb 日記論(向後千春)

<http://chiharu.cside4.jp/research/webdiary/index.htm>

個人情報発信メディアとしてのweb 日記(赤尾晃一)

<http://tokyo.cool.ne.jp/webdiary/keynote.htm>

日記についての考察(CRAZY HAL)

http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Keyaki/5625/nikki_ko-satu.html と /nikki_ko-satu02.html

Web 日記を書く心がけ(結城浩)

<http://www.hyuki.com/dig/webdiary.html>

[ウェブ日記に関するリンク集]

ウェブ日記関連リンク

<http://www.h14m.org/link-j.html>

日記を認めるシステムたち

<http://kohgushi.fastwave.gr.jp/aboutdiary/>